

令和6年度 見附市総合教育会議 議事録

○招集日時

令和6年1月31日（金）午後2時

○招集場所

見附市役所5階 委員会室

○会議に付した協議テーマ

「未来の見附市を担う人材について」

～子育て世代に選ばれるための見附市の教育～

○出席者（6名）

市 長 稲田 亮

教育長 渡邊 茂夫

委 員 小林 弘武

委 員 小倉 美砂子

委 員 齋木 可奈子

委 員 武田 信一

○関係者および事務局出席者

教育部長兼教育総務課長 近藤 芳生

学 校 教 育 課 長 佐藤 昌弘

こ ど も 課 長 鈴木 浩

企画調整課秘書広報室長 山口 悦正

教育総務課課長補佐 岩崎 済

○傍聴者（3名）

14時00分 開会

1 開会

事務局

定刻になりましたので、これより令和6年度見附市総合教育会議を開会いたします。

本日の会議の進行を務めさせていただきます、教育総務課の近藤です。よろしくお願いします。

それでは、次第に沿って進行させていただきます。はじめに、稲田市長からご挨拶をお願いします。

2 あいさつ

稲田市長

こんにちは。見附市長の稲田でございます。本日は、ご多用の中、教育委員の皆様から総合教育会議にお集まりいただきまして誠にありがとうございます。また、平素から見附市の子どもたちの教育の充実発展のためにご尽力いただいていることに対しまして、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

さて、私も市長就任以来、見附を「暮らし満足No. 1のまち」にすることを目標に掲げ、その実現に向けた特に大事な取組の一つとして、子どもと子育てを徹底的に支えること、「子育てするならやっぱり見附」と言ってもらえるよう、子育て世代から見附に住んでもらい、また住み続けてもらえるよう様々な施策に取り組んでいるところでございます。

教育におきましては、その主役である子どもたち自らが課題を発見し、分析、判断を行い、何事にも積極的にチャレンジし、実行に移していくマインドや能力を身に付けて欲しいと考え、令和5年度から、アントレプレナーシップの視点を取り入れた教育活動の推進を各学校をお願いしているところでございます。

今年度から更なる進展を目指し、「みつけJobチャレ教育」と命名しまして、その取組によってキャリア教育を推進し、共創郷育と合わせて、子どもたちが将来見附に戻って、できれば起業して戻って見附で働いていただく、そんなこ

とにチャレンジして欲しいという思いも込めつつ、これからの時代を力強く生き抜いていく力の育成に取り組んでいるところでございます。

しかし、その一方で、全国的な少子化が急速に進展しており、様々な策を講じつつも、見附市も例外ではない状況でございます。少子化は児童生徒数の減少に直結し、学校配置等の基本的な状況に大きな変化が生じ始めています。このことについて、子育て世代から不安の声が聞こえるようになってきました。

また、子どもたち1人1人の多様性を尊重した、きめ細やかな支援ニーズに応じていくなど、これからの時代に合った誰も取り残されない教育環境整備の必要性も高まっているところでございます。

こうしたことから、人口減少、子どもの数を減らさないようにする少子化対策の取組も進めていますが、一方でこういった状況を踏まえ、令和5年度には将来の教育環境をテーマに市民の声をお聞きするタウンミーティングを実施し、その結果、これからの教育環境の議論が必要であるとの方向性が確認され、教育委員の皆様からのご賛同いただき、「見附市立学校配置等検討委員会」が設置されて、今議論を進めていますが、その検討委員会では、将来を見据えた市の教育環境について議論を重ねていただいているところでございます。

現在、かなり終盤にきていると聞いていますが、今後一定の方向性を指し示す答申を年度内にお受けする予定になっています。

そして、令和7年度は、市の最上位計画である「第5次見附市総合計画」の計画期間10年間の最終年度ということで、来年度はそういう年になります。

総合計画が包含する「見附市教育大綱」も総合計画に含まれますが、これにつきましてもひと区切りを迎えるということになります。

市長就任時から開催している「ふれあい懇談会」でいただいているご意見なども踏まえながら、これまでの施策の検証、見直しもしっかりと進めて、5年10年先の未来を見据えた、持続可能で希望が持てる将来計画を示せるようにしたいと考えています。

この「総合教育会議」につきましては、地方教育行政の組織及び運営に関する法律の規定に基づき、教育委員の皆様との意見交換の場として用意させていただいたものでございます。

行政の舵を預かる身としまして、本日の議論の結果は、今後の教育行政や子育て施策に反映させていきたいと考えています。

見附が、将来にわたって多くの方々から選ばれるまちとなっていくためにも、活発な意見交換をさせていただきたいと思います。皆様もぜひ忌憚のないご意見をくださいますようお願い申し上げまして、私の開会の挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

3 意見交換

事務局

ありがとうございました。それでは、3. 意見交換に移ります。

今年度の総合教育会議では、「見附市の未来を担う人材について～子育て世代に選ばれるための見附市の教育～」を議題とさせていただきました。

市では地域とともに協力しながら子どもたちを育てていく共創郷育を推進し、0歳から18歳までの一貫した切れ目のない支援を行っておりますが、未来の見附市を担う人材を育てていくため、令和時代における子どもたちの環境をどう作っていくかを考えていただきたいと思います。

また、未来の見附市を担う人材を育てるために、子育て世代に選ばれる見附市の教育について総合的に判断いただき、次期教育大綱に向けて協議をお願いしたいと思います。

初めに事務局の方から資料の説明をいたします。その後で、本日の議題について皆様で意見交換していきたいと思います。

3－（１）事務局説明（学校教育課）

事務局

それでは、まず最初に、学校教育課から説明をお願いします。

学校教育課長

学校教育課の佐藤です。よろしくお願いいたします。

まず、学校教育課では、見附の未来を担う子どもたちのために、今年度より「みつけＪｏｂチャレ教育」と名付けて、アントレプレナーシップ教育の取組をさらに充実させようとスタートさせました。

はじめに、なぜこの見附で子どもたちのためにアントレプレナーシップ教育を取り入れることにしたのかについてお話したいと思います。

令和３年度になりますが、国の成長戦略会議の中で、我が国で起業家が少ない原因として、学校教育の中で起業家精神を育む学びを位置づける必要性があるということが示されました。民間の日本経済団体連合会でも優先的に取り組むべき教育施策であると述べられております。

また、令和４年度の県の総合教育会議の中でも、アントレプレナーシップ教育の推進が掲げられ、県としても取り組みが始まりました。

見附市でも、これまでもキャリア教育に取り組んできたわけですが、今年度の全国学力学習状況調査の児童質問紙からは、小学生６年生では、「人の役に立つ人間になりたい」や「地域社会を良くするために何かしたい」部分は全国よりは高いものの、自分の良さや将来の夢に対しては、肯定的な回答が低かったという結果が出ました。中学生も同様の結果が見られます。

こうした動向や、見附市の子どもの実態から、これからの時代を生きていくために必要な力とアントレプレナーシップ教育の中で育まれるとされる高い志や意欲を持ち、他者と協働しながら新しい価値を創造する力が重なるというふうを考え、見附市の共創郷育のもと、官民学が協働して「みつけＪｏｂチャレ教育」としてこれまで以上に力を入れて取り組むことにいたしました。

誤解のないように確認ですが、アントレプレナーシップ教育は、起業家を育成するための教育ではなく、チャレンジ精神、創造性、探究心などの起業家精神と情報収集、分析力、判断力、実行力、リーダーシップ、コミュニケーション力などの起業家的資質・能力を育成することを目指しております。

私たちが「みつけＪｏｂチャレ教育」を進めていくうえで大事にしているのは、課題を見つけることや実社会と繋がること、失敗体験から学んだり、新たな価値を創造したりすることです。

そのための方策として、講演会や出前授業の実施、職場体験や職業体験、模擬

会社支援、「みつけビジネスアイディアコンテスト」などに取り組んできました。

それでは、子どもたちの様子と、育みを目指した力について少しご紹介いたします。

まず、これは企業経営者などの講師による講演会や体験などを取り入れた授業の一場面です。子どもが目的や目あてを持ってチャレンジしようという姿が見られたり、自分の将来や進路について考えたりする姿が見られたといえます。

こちらは職業調べや課題解決型職場体験の様子です。子どもの返事や挨拶に対する意識の向上が見られたり、子どもが学校生活において主体的に体験活動に臨む姿などが見られたりという話を聞いています。

こちらについては、地域のお店と商品開発や販売体験の様子です。商品を販売するまでの過程において、価格設定はいくらが適当か、商品を買ってもらうためにはどのような方法が良いかなど、子どもが相手の立場に立ち、失敗体験を繰り返しながら、よりよい価格や方法を模索する姿が見られました。

地域コミュニティと協働した地域の課題を解決する地域学習では、子どもが見つけた課題を解決するために、学校運営協議会や公民館などにアドバイスを求めるなど、失敗を恐れずに課題解決に挑戦する子どもの姿が見られました。

次ですが、今年度、新潟大学経済科学部の伊藤龍司先生からご指導いただきながら「みつけ子どもビジネスアイディアコンテスト」を実施しました。「見附にこんなニラの特産品があったらいい」をテーマに、ビジネスアイディアを募集しました。ただアイディアを考えるだけでなく、アイディアを生み出す過程を重視するために、思考ツール「エクスカージョン」を活用しながら子どものより豊かな発想を引き出すように努めました。本取組を通じて、子どもが見附市の特色や現状を再認識したり、見附市の未来を語ったりする姿が見られました。希望制の中で実施したわけですが、679名の小・中学生が応募し、ニラを使ったお菓子やスイーツ、中にはニラ型のブランコなど非常に豊かなアイディアの中から、市長賞、教育長賞、商工会長賞が選ばれました。

このように、「みつけJobチャレ教育」を通して育まれる力が、未来の見附を担う人材の育成に繋がると考え、教育委員会だけでなく、市役所の各課、地域

企業と連携して取り組んでおります。この話題をもとに、見附でどのような子どもを育てていくのか、そのためにどんな力をつけていけばよいのか、ご意見をいただければと思います。

次に、見附市の小・中学校において重要課題として捉えている不登校の問題についてお話させていただきます。

学校では、不登校児童生徒を何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因、背景により、登校しない、あるいはしたくてもできない状況にあるために、年間30日以上欠席した者を不登校として定義しております。この中には病気や経済的な理由にあるものは除いております。

平成25年から令和5年までの10年間の推移を見ますと、中学校では令和3年から、小学校では令和5年から不登校数が増加していることがわかります。

原因としては、「不安や気になることがある」、「周囲との関わりがうまく築けない」、「学習の悩み」、「学校への不満や不適應」、「生活の乱れ」など様々にありますが、原因がはっきりしないものも少なくありません。

ただ、不登校については、不登校は取り巻く環境によって誰にでも起こり得るものであり、不登校は必要な休みという見方・考えに立つことが大事だと考えております。

そこで、支援のあり方として、なぜ行けなくなったのかと原因のみを追求したり、どうしたら行けるのかという方法のみにこだわったりするのではなく、本人の意思や本人が持っている強みや興味関心も含め、気持ちを理解し、想いに寄り添いつつ、個に応じた具体的な支援を行うことを大事にし、将来において社会的な自立を果たすことを目標として、自己肯定感を回復すること、コミュニケーション力やソーシャルスキルを身につけること、そしてSOSを出せるようになることなどを重視した支援を行っております。

見附市としては不登校支援において、誰ひとり取り残されない学びへのアクセスを実現することと、見附の共創郷育をいかした学びの場を提供することを大事にしています。今年度は「すこやかルーム」という市の教育支援センターの他に、すこやかルーム別室として「ふるさと教育支援センター」を設置しました。これは市内8ヶ所の公民館に設置されており、オンラインの授業配信を利用した

り、自分のペースで学んだり、地域の方と一緒に活動することで社会性を身につけたりできる居場所として整備したものです。

もう1つは、「フリーラボみつけ」という学びの場も整備しました。これは「プレイラボみつけ」の空き時間を利用して、自分のやりたいことを考えて主体的に活動に取り組んだり、自ら学んだりする居場所の提供をするものです。

学校自体も1人1人に合わせた学びが進められる授業作りや、児童生徒主体の絆作りを進めるとともに、「校内教育支援センター」を設置するとともに、誰もが安心して過ごせる居場所を作るように努めております。加えて、ICTを活用した学習支援や、オンラインによる授業配信、教材のオンラインでのやり取りなど、どこにいても学びにアクセスできる環境を整えております。

その他に、令和5年度に市内にフリースクールがオープンし、現在数名の子どもが通っております。市外に通っている子どももいるため、出席要件を整理して、フリースクールとの連携を図っております。

以上、教育委員会や学校は様々な手立てを講じ、地域と連携を図る中で、不登校の子どもたちに対応していますが、さらに家庭を含めて未来の見附を担う人材を育成するという視点から、どのような子どもを育てていくのか、そしてどのような力を子どもたちに育むことが必要なのか、そのためにどのような活動や連携、啓発、環境が必要かご意見をいただければと思っております。

以上で学校教育課の話題提供を終わります。

3－（2）事務局説明（こども課）

事務局

それでは続いて、こども課から説明をお願いします。

こども課長

こども課からは、「見附市こども計画（案）の概要」ということで説明をさせていただきます。

現在パブリックコメント中であります計画の案です。計画自体の説明もありますが、本日のテーマである「未来の見附市を担う人材」を考えるうえで、関係が

深そうな部分にスポットを当てて説明をさせていただきたいと考えております。計画策定のために現状分析やアンケート調査を行っていますので、その辺りもかいつまんでとなりますがご紹介したいと思います。

最初に、こども計画についてのおさらいです。こども計画は、こども・子育て施策等の基本方針や目標、具体的な取組を体系的に定めるものです。端的に言えば、自治体の各部局で行うこども・子育て施策に横串を差すような計画と言えます。

計画の策定はこども基本法で定める努力義務で、国のこども大綱を勘案するものです。県を含めてどの自治体も今作成中で、それぞれが独自のやり方、まとめ方で作成しているといった状況でございます。

見附では「見附市こども・子育て地域協議会」で3回にわたり協議をしており、素案をまとめて、「こども・子育てどまんなか条例」の理念に沿ったものとなっております。

また、見附では、「子ども・子育て支援事業計画」、「見附市子ども若者計画」、「子どもの貧困対策推進計画」、これらと一体に策定をしております。3月の制定を予定して、計画期間は令和7年から11年度の5年間となります。

計画は、こども・子育てを取り巻く現状を分析するところから始めています。ここで詳しくこの状況を申し上げますが、人口が減少している中での計画であり、その他にも、世帯の構成、保育教育施設の状況などを整備して計画に載せております。その中で近年の環境の変化が綺麗に表れているものを1つご紹介したいと思います。

就業者数の推移です。この2つのグラフがありますが、男性の方を見ますと、この50代以上の就業率が上がっていることがわかります。もっと顕著なのが女性の方で、全体的に就業率が上がっているところがありますが、特にこの50代以降の女性の就業率というのが上がっているということがわかります。このことから、これまでのように子育ての支援を祖父母に頼るということは難しくなっている状況というのが見てとれると思います。

続きまして、こども計画策定にあたり様々なニーズ調査を行いました。子どもたち自身に対する調査としましては、園児に対する調査、小学生、中学生、高校

生年代から39歳までの若者、また子育てをする人に対しては、妊娠期から子どもが乳児、それから子どもが29歳に至るまで調査を行っております。園児の声を聞く取組というのは他にはない見附市の独自の取組となっております。

少しご紹介しますが、園児の意見聴取の際に、「自分のまちにあったら嬉しいもの・こと・場所」というテーマで、年長児に絵を書いてもらいました。それが、本日1月31日から2月14日まで、「ネーブルみつけ」で絵の展示を行っておりますので、もしお時間がありましたらご覧いただきたいと思います。

説明を続けます。ニーズ調査の中で、テーマの未来を担う人材に関連しそうなものをいくつか紹介したいと思います。子ども、若者自身に聞いた調査ですが、子ども、「将来に明るい希望を持っているか」という設問に対して、このグラフを見ますと、小学生が最も高い数値で、年齢が上がるにつれ減少するという傾向が見てとれます。成長するにあたり現実に触れていきますので、こういった傾向は仕方のないことと思います。

この調査は、こども大綱の指標に基づく調査となっています。見附市ではこれまであまり取ったことのない意識調査だと思います。

こども大綱では、現状を2022年の調査結果を用いて説明していますが、国全体では、15歳から39歳までの回答として66.4%が「明るい未来を持っている」、「将来に明るい希望を持っている」と回答しているそうです。国は目標値を80%としております。

見附の数字で言いますと、一番低い、社会人・その他が66%となっておりますので、全体で見るともう少し高い数字となっていると分析しております。

続きまして、子育て家庭に対する調査の中で、「経済的な負担感」を聞いております。上のグラフが家計全体を対象に聞いたものです。子どもが生まれた後に苦しいと回答する方が一気に増え、その後、微増傾向になっています。

次に、「こどもにかかる経済的負担感」に限った聞き方をしますと、年齢が上がるにつれて負担感が増加するというところが見て取れました。

続きまして、「こども・子育て施策の満足度」についての調査です。全世代を通してオムツ用ゴミ袋の配布事業、予防接種の満足度が高くなっています。また、幼児の親にとっては妊産婦・新生児訪問、子育て支援センター等の満足度が

高くなっております。妊娠期間の人たちは、割と満足度が低い結果が出ております。

続きまして、「見附市が子育てしやすい環境と感じる」割合です。0歳から2歳児を持つ世帯が、育てやすい環境と感じる人の割合が1番多い結果となっております84.8%。その後は徐々に減少する傾向で、子どもが15歳から29歳の人では78.0%です。「やや」という回答を除いて、グラフで言いますと、濃い赤の部分ですけれども、「育てやすい環境である」と回答した割合に着目すると、妊娠期間が最も低いというような状況にあります。

続きまして、「子育て環境の改善に求められている要素」という調査です。全ての世代区分で経済的支援の割合が多くなっています。これもまた妊娠期間というところに着目すると、保育園などの入園環境、交流の場、情報が手に入る環境、相談窓口支援体制といった割合が他の区分に比べて高くなっているところですよ。

続きまして、「現状やアンケート調査の総括」です。産み育てる環境といった視点では、子育てに対する負担は、子どもの年齢が上がるにつれて増加しています。

子どもの成長を育む環境という視点では、「子ども・若者が意見を反映されていると実感しにくい」という結果が出ました。

また、子ども・若者が、「友人や家族と遊んだり、コミュニケーションを取れる環境の整備を求めている」、というところも総括として出てきたところです。また、教育や進学にかかる負担感の軽減を希望しているというところもあります。

子育てを支える環境といった視点では、子どもの世話や看護について、「頼れる人がいると感じている」割合が高いということがわかりました。私としてはちょっと意外な感じがしましたが、頼れる人がいると感じている人は多いようです。

「子育てと仕事の両立環境の視点」では、職場の理解や協力を求めている人が多いと言えます。

続きまして、この現状の総括から課題を8つ整理いたしました。1つ目は「こ

どもや若者の声に耳を傾ける」、2つ目は「未就学児を育てる親を対象とした精神的身体的負担感の軽減」、3つ目は「出産直後および小学生以上を対象とした経済的支援強化」、4つ目は「勤務先や職場のこども・子育てに対する理解・協力の促進」、5番目は「妊娠中や妊娠前の方を対象としたこども・子育て施策の丁寧な説明」、こういったことをすることによって安心感を持ってもらうことが必要であろうということです。「こども・子育てに関する相談環境の整備」、これは分析の中で、対面と非対面の両面で相談しやすい環境の整備が必要であろうということです。7つ目は「こどもや若者が、安心して過ごすことができ、地域との繋がりやコミュニケーションの中で、成長することができる環境の確保」、8つ目は「貧困や家庭環境、経済的な理由によって、夢や目標を諦めることを防ぐ環境の確保」という課題が整理されました。

これらの結果を受けまして、計画の基本理念は「みんなで子育て こどもどまんなか 笑顔輝くまち みつけ」と決定しました。これは「こども・子育てどまんなか条例」のキャッチフレーズとなっております。

整理した8つの課題を受けて、基本目標を5つ設定しました。基本目標1は「こどもや若者の声と思いを尊重する」というもので、これは次の目標の2から5に反映させます。

基本目標2「誇りを持って夢や目標に向かって挑戦できるまちを目指そう」、基本目標3「安心してこどもを産み育てることができ、健やかで心豊かな成長を育む環境」、基本目標4「こどもを思い、子育て家庭をみんなで見守り、支え合う地域性を育む」、基本目標5「ワークライフバランスを実現し、仕事と子育てに明るさを持てる環境」このような目標を立てました。

次のページが体系的に見て取れる図です。課題、基本理念、目標、施策といったものはこのような関係になっております。8つの課題から5つの目標を設定して、目標に対応する17の施策を組み立てたところです。

施策1、これは目標1の「こどもの声を尊重する」に対応するものです。子どもや若者の意見を尊重し、各種施策に反映していくための体制整備という施策で、この中には、例えば「ふれあい懇談会」や「小学生キッズサポーター」からの意見聴取を行っていきたいと考えております。

施策２－１、２－２、２－３は目標２に対応するものです。目標２は「こどもたちが夢や目標に向かって挑戦できる環境を整える」というものです。施策２－２では、「こどもや若者の社会進出に向けた地域人材育成と活用」というもので、取組としては、先程説明があった「Ｊｏｂチャレ」や、将来のライフデザインを希望を持って描けるようなセミナー等の開催、中学生の地域スポーツ文化クラブ活動環境の整備などの取組を体系づけております。

施策３では「安心してこどもを産み育てることができ健やかで心豊かな成長を育む環境」に関係する施策になっています。３－２では、「こどもや母親の健康の確保」ということで、新生児訪、産前産後サポート、これは妊婦さん等に運動を促す「健康スマイルスタジオ」という事業も入ります。また、月齢に応じた健康診査も、この施策に入ります。また妊婦さんに丁寧に情報を届ける取組は、施策の３－３、３－１辺りも関係してくると思います。施策の３－４は、配慮を必要とする子ども家庭への支援です。児童発達支援の関係であったり、ひとり親の支援等の取組がここに位置づけられます。施策３は３－７まで続きます。

施策４は、「地域みんなで支え合う」ということを目標にしたものです。「こども・子育てどまんなか条例」でも大切にしているところで、見附らしさを出しているところになっています。施策４－１としては、市民の方々にボランティアとして支えていただいている取組が並んでおります。施策４－２では、「地域や家庭の子育て力の向上や地域ぐるみでこどもを育む意識の醸成」ということで、学校支援ボランティアの育成、地域コミュニティの活動支援、市民活動団体との協働といった取組があります。施策４－３は「こどもたちが安全に快適に遊ぶ、学ぶことができるという施設」で、地域の力をお借りする取組であるとか、プレイラボ、公園施設などを位置づけております。

施策５－１から５－３は、「ワークライフバランス、仕事と子育て」に関わる施策です。施策５－２に「子育てしやすい職場作り支援」を掲載しております。

このように１７の施策を体系づけて定めております。

スライドの最後になりますが、評価指標と目標値です。基本目標ごとに評価指標を定めております。内容としては、策定のために行った調査と同様な意識調査を行って、測るものを中心に、その他放課後児童クラブや保育園の状況、育休を

取得した保護者の割合を目標値としています。

先ほどご紹介したような取組や、計画の期間中に新たに生まれてくるような取組も出てくると思いますが、これらを進めて、経営計画の最終年度、令和11年度に目標値を達成できるよう計画を進めていきたいというものでございます。

こども計画の案についての説明は以上となります。

3－（3）意見交換

事務局

それでは、意見交換に入りたいと思います。

まず最初に、「みつけＪｏｂチャレ教育と不登校の現状と対策について」の感想やご意見をいただきたいと思います。

いかがでしょうか。

小林委員

今までこども計画まで含めて説明していただいた中身は、とてもいい形で組み上がって頑張って進めていけるかな、というふうに思いましたが、やはりテーマとなる「どういう子どもを育てたいのか」ということを語っていく時に、やはり子どもだけ切り離しての組み立てで行くのか、と言えば、それだと抜け落ちてくる部分が相当出て来ると思います。

例えば、「Ｊｏｂチャレ教育」も、身近なところの大人というか、実際に働いている自分の親であったりとか、周辺、遠い親戚の叔父さんなど、やはりロールモデルというか、しっかり見えてこないと、色々な職業訓練や体験をやってみてもなかなか根付くっていう形には難しいかなという感じがしています。

ですので、それがわかっている人は、割と進んでいっている人が多いように思います。「自分はこうなりたい」というテーマの設定が、子どもなりにできていれば割と早い気がしますし、大半の人は迷ってフラフラするのが普通なのかわかりませんが、やっぱり大人ということ見附市全体の産業の育成や強化などが大きく関わってくるような気がします。

実際、先程「将来に対してどう思うか、という夢を持っているか」の質問で

は、年齢が上がるほど下がってくると、大体现実が見えてくるとそうなるんだという説明でしたが、本当はそればかりではいけないのではないかと思います。やはり大人が、はつらつとしていく、ということを間近に見ていることは大きいかなと思います。それは教育委員会だけで語るテーマではなく、広がり過ぎになるかも知れませんが、私はそのような気がしています。

また、不登校の現状について見せられると、これはもう全国ニュースでも報じられていますが、不登校が増えているということは、しばらくずっと聞いていたもので、見附市だけが特別なことがあるということもないでしょうから、同じ原理現状を示しているということだと思います。それこそ、どういう子どもを育てていくかというテーマに大きく絡む問題をはらんでいる部分でもあると思いますので、この辺も少し力を入れてみるべきだと本当に強く思っています。

事務局

ありがとうございました。

ただいま小林委員よりご意見ありましたが、委員の皆さんの中で何か意見のある方はおられますでしょうか。

齋木委員

私も今、小林委員がおっしゃったところと同じ、重なる部分がすごくあります。

その自己肯定感を上げたりとか、将来に希望を持ったりという部分で、見附市としてまち全体で関わっていく部分が、なくてはならないのはもちろんですが、それ以前に親の力というか、例えば一つ一つの行事や教育などに力を入れて、子どもに与えても、「子どもがこういうことをした」ということを、一緒に住んでいる親が、もしかしたら忙しすぎて見てあげられていなかった場合があたり勿体ないなと思います。

年齢が上がるにつれて、経済的に「しっかり自分が何とかしなきゃ」というところで仕事が忙しくなったり、仕事を忙しくしなきゃいけないっていう部分がある一方で、ただ親と話せる時間とか、授業参観の参加率とか、PTA、参観日の

後の学年懇談会の出席率とか、そういったところがいまいち分かりません。もう少し一緒に親も巻き込まれて「子どもを育てていこうよ」というところにも焦点を当てていくと、子育てもするけども、親育てもして欲しいって言ったら言い過ぎかもしれませんが、そうすると親に褒められて、親が「そんなこと頑張ってるんだね」というところから自己肯定感が上がったりとか、夢や希望を持てる瞬間ってというのは、きつともっと増えていけるチャンスが、これだけの企画や、これだけ考えていただいているところからできるんじゃないかと強く感じています。

小林委員がおっしゃっているところで、少し重なると思って述べさせていただきました。ありがとうございました。

事務局

ありがとうございました。小倉委員はいかがでしょうか。

小倉委員

概ね同じような考え方ですけれども、やはり何か子どものうちからいろいろな経験を積み重ねていくというのは、非常に大切なことだなと思います。数ヶ月前に考えたことがあって、教育委員会定例会の後で、教育長室での雑談で話題にもなったのですが、新潟県は歩行者が渡ろうとしている時の車の停止率が悪い、という話をしたのですが、その後何かのニュースで、比較的車の停止率が高い長野県は子どものフォローなど、登校する段階で横断歩道を渡ろうとしたとき止まってくれたら、必ずみんなで止まって運転手さんに挨拶をするそうなんです。何かその積み重ねで「大人になっても止まってあげなくちゃ」という、無意識のうちにそういう動作が身に付いていくというのが、やはり子どもからの習慣って大切なんだなと感じた事例でした。

また「J o b チャレ」もアイディアコンテストの時に出席させていただいて、新潟大学の伊藤先生のお話を聞くと、「子どもの夢は、ほぼ何か実現できることが多い」というお話も伺ったので、「そんな理想だよ」と大人はつい考えがちなんですけれども、やはり子どもがやりたいっていうところをいかに伸ばしてあげられるか、というところで大人の力が大事ななと思います。子どもの考えを否

定しないで、一緒に考えてあげる、褒めてあげるなど、そういうことは大丈夫な
んだらうなと思っています

それと関連付けられるのは、不登校に対しても今自分の子どもがどういう状況
にあるか、ということが一番把握しなければならないのは親だと思うので、学校
に行けないことを学校のせいにしたり、先生のせいにしたりする親は結構いるん
じゃないかなと想像していますが、友だち関係や部活、先生が嫌だとか、そんな
ような理由の子たちも耳にすることもあります。いろいろな原因があると思いま
すが、やはり子どもが今どういう状況かということをややはり親がしっかりと見て
いかないといけないところであって、子どもの教育は全部学校・保育園に押し付
けてしまう、というようなことにならないように、親を巻き込んで一緒に子育て
していくべきと思います。

いろいろな提案というか、不登校に関しては、サポーターが居たりですとか、
いろいろな施設の利用をできたりとかありますが、やはり1人1人個々の事例が
違うと思います。窓口は広い方がどこかにヒットしてくれたら、学校には行けな
いけれども、自宅でタブレットでなら、みんなの教室の様子を見ながら一緒に学
習できるとか、学校に行けない子どもは、人の中に入っていけない理由があるわ
けですので、無理にみんなと一緒にしようとか考えないで、今はやっぱり便利な
ツールもあるので、そうして少しみんなのところに行ってみたいな、というよう
な気持ちに持っていくとか、そういうふうにもうまく活用できていったらいいなと
感じているところです。

私も起業家ではありませんが、自分のやりたいことをある程度やってきている
と思います。やはりそれには親の協力、本当に助かった部分が大いにあるところ
ですので、やはり総掛かりな子育てというのが大切ではないか、と感じていると
ころです。

事務局

ありがとうございました。

武田委員からも一言いただけますでしょうか。

武田委員

概ね皆さんと同じですが、ただ小倉委員もおっしゃられていましたが、やはり親が子どもの状況をよく知っているという状態が必要だろうと思います。今回

「J o b チャレ教育」や「不登校の状況」などいろいろ資料がある中で、子どもたちについての資料もありますが、知り合いの話を聞くと、仕事が休みづらいとか、子どもの用事のために休みづらいという会社も、業種によってもまだまだ多いなと感じます。ですので、やっぱり会社を経営されている方の考え方もあると思いますが、利益も上げなきゃいけないですし、大変だとは思いますが、子どもたちを育てるのはやはり親だと思なので、そのための時間を割ける環境っていうのはやっぱり作っていかうという意識は、経営者の方たちにも必要ではないかなっていうふうに感じます。

子どもたちがこうやって色々なものに挑戦していくうえで、やっぱり親にアドバイスをいただきたいとか、ちょっとしたことにアドバイスをしてあげたいとか、そういう人もたくさんいると思うので、そうなった時に、親子ともに共同で活動できるような環境になったら、もっとうまく進んでいくんじゃないかなって、見ていて感じました。

それが、これから子どもたちに行なうこの活動とは別に、何ができるか今は分かりませんが、そんなふうに感じました。

事務局

ありがとうございます。

教育長からは何かありますでしょうか。

渡邊教育長

小林委員がおっしゃったロールモデルは、私もとても大事な事だと思っています。やはりその憧れとなる存在があるからこそ、そこに向かって自分の力を高めていくことができる、そんなふうに思います。ですので、私は校長会などでよくお願いするのは、とにかく上の学年の子どもたちが下の学年に伝えるということ。また、下の学年の子どもたちが上の学年に学ぶという機会や場をぜひ大事に

学校の中で作っていただきたい、というお願いをしています。

それがまた、学校の伝統ということに繋がったり、より良いものを求めていく、そんな姿にきっと繋がっていくのだらうと思います。

またさらに、前のときと同じ取組みを次の学年がやるのではなく、きっと子どもたちはそれを乗り越えようとか、もっと何かできることはないだろうとか、そんなふうに前向きな姿をきっと見せてくれるはずだと、そんな思いの中でお願いをしています。その点をこれからももちろん大人が、その一番のロールモデル、一番身近な家族こそが、そのロールモデルであってほしいという願いはあります。

「こども・子育てどまんなか条例」の第5条に、「保護者はこどもの権利について理解し、家庭がこどもの心身の成長や人格形成に基本的な役割を果たすことを認識し、こどもが心身ともに安らぐことができる家庭作りに努めるものとする」という条文を入れております。この条文をぜひ保護者の皆さんにはもう一度噛み締めていただいて、これをまたこども課を中心にしつつ、いかに広く保護者の皆さんに周知できるか、というところをまたこれから大事にしていかなければいけないなという、そんな気持ちでいるところです。

事務局

ありがとうございます。

市長からもお願いします。

稲田市長

わかりました。教育委員の皆様、教育長を含めてですけど、皆さんから様々なご意見いただきましてありがとうございます。

そうですね、「J o b チャレ教育」に対する思いは、また後ほどにさせていただいて、皆さんから出た意見の中で、結構親がしっかりと子どものことを理解しなければならない、その辺のご意見が結構出たのではと思っています。やはり子育てしやすい環境を支援して欲しいところも大事ですし、それも市として、あるいは周りの企業や地域が支えることも大事ですが、親にも成長していただく、そ

んなところの取組ということも、やはりやっていった方が良いのかどうなのか、今ご意見聞いて思ったところです。

こういったものをいかに保護者の方に伝えていくか。見附市の場合は、こども課が教育委員会の中に入っていて、しっかりと連携できる体制がありますので、また今後の取組、これは先程の計画の中にそういったことが入っているかどうか分かりませんが、保護者の向上など、そういったところは改めて思いました。

それから、最後に武田委員がおっしゃっていましたが、仕事を休みづらい環境という意味で言えば、子育てしやすい職場づくりについては、比較的に見附市としてもかなり力を入れさせていただいて、企業の皆さんの前では「本当に協力してください」、それが逆に言うと順番や知見と、体力が弱いからできないではなく、そっちをやるのが先で、そういう職場環境をつくることこそが、人材を集めることに繋がるということをいかに企業の皆さんに理解していただくか、これはまだまだ私もやり足りてないのですが、今どちらかというと企業に対してそういった取組をしたところに支援金を出したり、あるいは育児休業を取ったときにお金を出したり、あるいは設備投資するときの補助金をかさ上げしたり、させていただいてますが、そこも含めて、またさらにどういうことができるか、企業の皆さんとまた意見交換できれば、というふうに思っているところでございます。

それから小倉委員からは、停止率が悪い車の話がありました。それは私もずっと思っていて、見附市というか新潟県に戻ってくると本当に車が止まらないと感じます。でも、子どもたちが挨拶すると止まるかもしれないという話がありましたが、歩行者の方から実施していく、歩行者側からアプローチもするというのも確かに大事なのかなと思いました。ご意見ありがとうございます。

最後の「J o b チャレ」について、不登校もあるのですが、今まさに力を入れさせていただいていますけれども、教育の充実というか特色化、できるだけ見附で子育てできる、呼び込みできるためには教育の環境が良いことが大事ですし、その1つが教育の質の充実ということです。それともう1つが、特色あるという部分があって、その1つで進めているのが「J o b チャレ」であり、今、教育委員会で力強く進めさせていただいているところでございます。

本当は、見附で学ばせる、それもそうですし、子どもたちが見附を好きになっ

て見附に戻ってきたいと思えることも、将来的に見附の人口減少対策という観点からも大きい部分があるところでございます。

今説明があった「J o b チャレ教育」、そして見附の教育でこれまで目指してきた部分「ふるさと見附を愛する子ども」、「世に役立つことを喜びとする子ども」、この「J o b チャレ」については、どちらかというチャレンジ精神なので、必ずしも見附に戻るかどうかというのは別問題の教育ではあるけれども、今までこの見附市が進めた教育とセットになることによって、一旦出ても見附に貢献しようとか、見附好きだし、それが相乗効果として繋がればという思いで、市や教育委員会としても、この「J o b チャレ教育」、他の課にも協力するようにかなり強くお願いしているところでございます。いかに教育を発展できるかということは、また皆様のご意見をお聞かせいただきながら進めていきたいと思っているところでございます。

あと最後に、不登校対策の関係では、先ほどご意見もありましたけれども、市や教育委員会で多様な取組を行なっています。多様な選択肢があるということがやはり大事であると私自身も思っています。

そんな中で、教育委員会の中の部分になりますが、その取組とフリースクールの連携ということで話がありましたが、最近非常に話題になっている中で、これをどういうふうに捉えていくか、但しこれをどう評価していくか、連携してくかということはなかなか難しい部分がありますが、一方で、民間の力というものもある意味大事な部分がありますし、そういったところも参入を促進する必要があるのか、今後いろいろと見極めていかなければなりませんし、教育委員会でも考えていただきたい。ただ、やはり大事なのは、利用する子どもたちや保護者の不安の声を、今も教育委員会でもしっかり聞いていただけてますが、そういった不登校の家庭の人たちの思いをいかにしっかり聞き取れるか、ということが大事なのではないかと思っています。ぜひ、そういったところを踏まえて、次に何が必要なのか、教育委員会でも検討いただければと思っている次第でございます。

私からは、これまでの関係では以上です。

それでは、「みつけＪｏｂチャレ教育」と「不登校の現状と対策」について、他にまだ何か意見はありますでしょうか。よろしいでしょうか。

今までの意見を聞きまして、学校教育課の方から何か補足とかあればお願いします。

学校教育課長

本当に今、教育委員さんたちのお話を聞いて、やっぱり保護者の部分がとても大事だとおっしゃられた部分、学校教育課としては本当にありがたいな、心強いなと思ったところです。

私もやはり家庭というのが、まず第一のロールモデルになりながら、子どもたちの不登校であれば励ましたり、背中を押したり色々な関わりができると思いますし、職業観についても親の姿を見て、ということももちろん大事だなと思っています。

ただ、なかなか親自身が自分のロールモデルを持たないまま親になってしまっているケースもあるのではないかと感じます。もちろんそういう様々な家庭があるところも踏まえた上で、学校に来た子どもたちを全て同じ土俵の上で育てていくというのが、学校の大事な使命であると思いますが、学校もあまりにも様々な対応が多くあり、抱えきれなくなっているというのが今の状況なのかなと思います。

そういった面で、もう一度見附の共創郷育の原点に立ち返りながら、まずは一番身近な「支える、ともに歩んでくれる家族」という部分も大事にしながら、地域の力も入れながら、また色々な学校課題を解決できたら良いと思ったところです。

事務局

それでは次に、「見附市こども計画の概要」についての感想やご意見をいただきたいと思います。いかがでしょうか。

小林委員

ひと通り説明を聞かせていただいて、いつも皆さんが一生懸命された仕事というのは、立派に組み上がり過ぎて立派だなと思います。ですが、どうやってこれを形にしていく、評価をしていくという目標もしっかり持たれて、すごく型にはまって立派だなと思う反面、総花的に盛り込んであって、力の入れどころが果たしてどういうふうに向かって行くのかというところが、本当はこういう子どもが育つというところへ収斂（しゅうれん）されていくことで検討されたと思いますが、これを外側から見ると、そういう感想を持ってしまいます。以上です。

こども課長

ありがとうございます。

これを見ると、やはり行政としては漏れがないようにというのがありますので、どうしても総花的な印象になってしまうのかなと思っています。

ただ、委員の皆さんがおっしゃられるように、それでは自治体がどこに力を入れていくのかというところは、自治体のあり方だと思いますので、そういったところは表現がちょっと足りないのかなと思っています。

ただ、中身としては、見附らしさというところで、子育てに関しても地域の力を今現在もお借りして、共創郷育というテーマもありますし、今も行なっているところです。そして、これからもそうやって地域の協力を得て行きたいというところで、取組は充実できていると思っております。

小林委員

そうですね。これとても面倒なんですよ。お気持ちは分かります。いつもこども課さんをいじめてるみたいな感じで申し訳ないのですが、そんなところなんですよ。しょうがないと言えばしょうがないのですが。

稲田市長

本当におっしゃる通りで真摯に受け止めなきゃいけませんし、ただ「見附市こども計画」という意味では、いろんな部分で予算取りに使う部分もありますので、あえてそういう総花的にしておく面もありますので、ここに載っているから

支援してもらおうということもありますので、そこは気を遣いながら作っている部分ですのでご了承いただきたいと思います。今後、総合計画や教育大綱を作っていく時も、いかにどこに力を入れるかということが説明できるようにしておく必要があると思います。

小林委員

お気持ちは、よく分かります。そうなんですよ。

稲田市長

いろいろ、こういう計画ではその配慮が必要ですね。

小倉委員

最後の指標のところで「現状と目標値」という項目がありますが、ある程度のアンケートを取った中での目標とすべき数字だと思いますが、大体実現可能な数字が並んでいるのでしょうか。あくまでも目標は目標とか、高い目標など、その辺の指標としてはどんな感じでしょうか。

こども課長

この数値を設定するに当たりましては、低い目標にはしていません。現実的な線を見ながら、それでも高く、そういったところの線で考えて設定したものになっています。

基本目標5のところですが、部分的に見ると「やや高いな」というところもありますし、「高い設定をしてるな」というところもありまして、基本目標5のところで、「育休を取得した人の割合」というのは、母親・父親両方とも80%という目標を設定しています。

そういったところは、今現在ですと母親と父親には大分差がありますが、今後の社会のあり方としては、平等に子育てをしていかなければならないという面もありますので、そういったところで「やや高い目標」を設定しております。

大体現実的なところでも「高い目標」を一部目標として定めているところであ

ります。

事務局

他にご意見はありませんでしょうか。

齋木委員

私も見附で子育てをしてきて、そこでまた教育委員として関わらせていただいでいて、年々子育てに関して「いろんなサポートが増えているな」というのを肌で身近に感じてきているので、もう今の段階でも「かなり手厚いんじゃないかな」と感じています。ただそれが、子育て世代の中で情報を持っている人と、それをうまく使えなくてでも使いたい、という人がいると思うので、それを踏まえてですが、この施策の取組は「今まで積み上げてきたものがここに詰まっているな」という印象です。

ですので、アンケートも取って、これから子どもたちの声を施策に生かしていきますということで、これが1つ新たに加わったので、ここから動いていくことだと思うのですが、今までのものが詰まっている、それプラス今の充実したものからさらに充実させるところで、切り捨てられていくものもきっとあるのかもしれないですし、新たに出てくるものもあるだろうなという希望を持ってこの取組全体を見ていました。期待も込めて見ていました。

こども課長

ありがとうございます。

そうなのです。取組としては、やっぱり今見えているものしか並べられないので、こういう形になっているのですが、施策という部分では「もう少しこういったことをやっていきましょう」、という取組に関わらずというところを定めていますので、これでまたこのような施策に基づいて作った取組というものはどんどん増えていくと思いますし、また役目を終えたものは除かれていくだろうと思います。そのようなところは前提として考えているところでございます。

例えば今、施策として「何をやるんだ」「どういうことをやって、これを目指

すんですか」といったところで、今この取組には、今見えている中で並べているというところでもあります。

稲田市長

その辺を補足します。言葉が足りていないというところで、取組はあくまで例だと思えます。これだけで良いわけではありませんし、あるいは今回止めても良いですし、これを必ずやるということでもありません。今までやっていることを入れると例はこんな感じです。

これは誤解が生ずることがありますので、しっかり補足説明した方が良いと思います。

大事なのは、こういった一番最後にある目標設定で、アウトカム指標があつて、これもアウトプットではなくて、実施したら成果がある目標でなければ意味がなく、結局アウトカムと言って、成果としてそれぞれアンケート結果が出てくるものとか、結果として数字に出てくるものを並べているのですよね。

ここを達成するためにどういう政策をやっていくのか、ここを入れ替えてどういう取組をやっていくかというのは、今後引き続き、また考えていかなければならないというように思っています。

実は「これを何回やりました」などアウトプット指標もあつたのですが、それはあくまでも「やればすぐ回収できるものは意味がないよね」という話を今させてもらっています。でもいろんなご意見いただければと思います。ありがとうございます。

事務局

武田委員お願いします。

武田委員

私は単純に、いろいろと調査しているというデータがありますが、その中でちょっと調査の結果で受け取り方というか、子ども・子育ての取り巻く現状、ニーズの中で、50歳以上の女性の就業率が上昇しているという内容で、「これまで

のように子育ての支援を祖父母に頼ることが難しい社会に」という書き方になっていますが、実際、祖父母の方が直接子どもに接触する支援というのが難しくなったのかもしれませんが、経済的な支援というのは相当大きくなっていると思います。昔以上に孫をかわいがってる祖父母は増えているような気がします。

ですので、その50歳以上の女性が働いているということは、特に何か問題というふうに捉える必要はないのではと思います。老後の自分たちの生活を充実させるという意味でも、老後もずっと働き続けるっていう方も多いですし、この動き自体が子育てにとって逆風になっているかどうかというのはよく考えてみた方がいいのではと感じました。

また、それで経済的な負担感が年齢とともに増えてくるのは、もちろん学費も増えるのも当たり前ですし、子どもたちもどんどん成長していくにつれて活動が増えますし、スポーツであつたりもそうですし、やっぱり成人するに向けてどんどん子どもたちにかかる費用が増えていくのがもう目に見えているので、負担感はもちろん増大しているのだらうと思います。そこに保護者からの経済支援というのも大きく関わっていると思いますので、総合的にいろんな調査を、総合的に勘案していろいろと活動を考えていただけたらいいのではないかと思います。

こども課長

ありがとうございます。今日のスライドを作るために私が意図的にピックアップした部分もありまして、ちょっと短絡的に見えた部分もあるかもしれません。申し訳ありません。

この計画の中では、そういったいろんな状況を組み合わせての総括をして、目標という部分を立てておりますので、またそういったところも本日、遅くなりましたけれども計画案としましたので、ご覧いただければと思っております。

また、就業率の話ですが、これについては足かせとか逆風などと考えているわけではなくて、今までと少し状況が変わってきたというのは、もうこういうふうにはっきり分かる、というのをお示ししたかったというものです。武田委員がおっしゃるように、このことによって経済的な支援という部分は確かにあろうかと思っています。ここでは何か今までとちょっと状況が変わってきたのかなということこ

ろだけをご承知いただければというふうにお示したものです。

事務局

それでは教育長お願いします。

渡邊教育長

私は、基本理念である「みんなで子育て こどもどまんなか 笑顔輝くまちみつけ」この中身をしっかりとみんなで議論したいと思っています。「笑顔輝く」の、その笑顔になる状況とか、その笑顔の中身って何をもってその笑顔に繋がっていくんだろうか。その部分をしっかりと共有することによって、これがもっと価値ある計画といいますか、しっかり意味を持つことになっていくのかなと思っています。

ただ単に、お金もらえてよかったとか、それから何かちょっと助けてもらったからよかったとか、そういうレベルの笑顔でいいんだろうかと思うのです。

本当に子どもたちが、本当の意味で笑顔になる、笑顔になってほしい、その笑顔ってどういう笑顔なんだろうか。それはやっぱり、見附の教育で目指す「ふるさと見附を愛する子ども」「世に役立つことを喜びとする子ども」、そことどう関わっているかというところをしっかりと捉えていく。それから、こんな子どもを育てたいというところと、そこをしっかりと結び付けながら、このこども計画のその「笑顔が輝く」の笑顔を捉えていきたいなと、そんなふうに思っております。

事務局

市長の方からもよろしいでしょうか。

稲田市長

「こども計画」とか「こども施策全般」ということでよろしいですか。本当に皆さんからもご意見いただきましてありがとうございます。

この施策作り、体系の並びの計画作りについては、今、総花的ということと言

われましたので、いかにどこに力を入れていくのか、そういう時の説明の仕方も含めて、我々もまた考えていきたいと思っております。

ある程度バランスよく見せて、取り組まなければならない部分もありますので、そこはご理解いただきながら、特にという部分を入れるようにしていければと思っています。

やはり子どもたちが戻ってきたい、見附で育ったのが印象に残るといえるのか、見附で育ってよかったと思うことが大事だと思っていて、それも中長期的には人口減少対策の一手にもなるのではないかと考えているところでございます。

プレイラボもできましたが、アンケートでは、子どもたちの居場所や遊び場も確保して欲しいという意見もありましたので、遊具の整備なども含めて、何ができるのかをまた今後も考えていきたいと思っています。

もう一方、見附市もスマートウェルネスということでいろんな施設がありますが、こういったいろんな場所が出来上がって、この施設のあり方というのは、一方では議論しなければなりません、そこに出かけて行くことがまた子どもたちにとっても、出かけて行く場所や楽しみがある場所が増えていくことが、また大事なことだと思っておりますし、バスについては、今、中学生以下は無料にさせていただいて、自由にどんどん色々な場所に行って楽しんで思い出を作っていただきたいという思いがありますが、この辺もご意見いただければと思います。

そういう思いの中で、意外と保護者の方からは、「本当は一度帰宅しないで自由にいろんなところに行けたらいいな」、「結構学校が駄目って言うんだよ」という声も聞きます。一方で学校側は、安全確保の関係で「やっぱりしっかりと一度帰宅してください」という部分があるのですが、そのところをお互いの理解、保護者の方の理解も含めて、一方で保護者が学校側の責任にする部分があるのでなかなかできない部分もあると思いますが、しっかりと保護者の責任という部分で、できれば自由に動き回れるようなまち、あるいはもう車で送迎しなくても歩いたり自転車であったり、あるいは公共交通であったり、動き回れるまちになったら、それは見附が思い出に残るのかなという思いを今持っているところでもあります。またこの辺も、今後のまちづくりの中に入れられないかなという思いを思っていますし、まだ何も決まっていますが、そういったところもご意見

いただければと思っているところでございます。

それから、経済的な負担の部分もこのこども計画の中にあって、実はアンケートを取ると、どうしてもそこが一番の要望になってしまいますが、その軽減というところは市としてもいろんな財政も含めて一番力を入れたい部分と、お金がかかる部分で、どうするか悩ましい部分だなと思っています。少しずつでも叶えてあげたいというところも含めて考えていければと思いますが、いろんなところがある中で何に力を入れていくか、またよく考えながら施策を進めていきたいですし、教育委員会でもまたいろいろ考えていただければと思っています。私からは以上です。

事務局

ただいま市長の方からもありましたけれども、市長に何か聞いてみたいことはありませんか。

小林委員

全般を通じて、過去から大体同じところへ収斂（しゅうれん）する感じがしますが、結局、その子育て・子どもづくりを考えていくと、親づくりになってくるというのは、また同じ結論にきたなっていう感想を実は思っていました。ですので、子どもづくりというのは、「親づくり」であり、「まちづくり」なんだと思います。市長さんにしてみれば、やっぱり自分の仕事の本筋の「一番ど真ん中」というテーマになってしまうと思います。

ぜひ、そこら辺お考えいただいて、一生懸命お願いしたいと思うのですが、大テーマですし大変ですし、本当にその時々で一生懸命お話し合いをしていくと、やっぱり本当に「まちづくり、親づくり」なのです。「大人がしっかりしなきゃ」のような結論になってしまうのは、もうこれをまた繰り返したなという感じで、「それだけでやっぱり完成する話ではない」ということでもあるわけですが、これは我々も一市民として尽くさなければならない部分が残されているわけです。お互いに頑張って作り上げて行きましょうということなんだと思います。

稲田市長

ありがとうございます。いずれにしても、本当にまちづくりの部分というのは、見附市は割と今、市長部局と教育委員会に垣根がなく、教育長とも毎週のようになんか意見交換もさせていただいていますし、今、予算編成も答弁書作りも教育長と一緒にさせていただいています。そこをやっぱり垣根なくやっていけるところが、今、見附市の良いところかなと思っていますので、このまちづくりも、どちらかだけで出来るものではなく、一緒になってやっていかなければならない部分がありますので、本当に市全体で、総合力でいろいろ今後考えていければと思っています。

また、「親づくり」について、私もまた見附に戻って来て3年になりましたが、今までもこういう議論があったことは、あまり詳しく知らなかったのですが、また繰り返してきたということで、確かに今、「地域づくり」は大分前からやってきました。今、「職場づくり」に少し力を入れてやっています。それに対して「保護者づくり」「親づくり」。その部分を確かに私も視点の中では少し抜けていたと思っています。改めて思い直させられましたので、そこも含めて市全体として何が出来るのか、この辺も教育委員の皆さんからいろいろアイディアいただければありがたいですが、しっかりと取り組めるような形で考えていければと思います。ありがとうございます。

事務局

他にどうでしょうか。

武田委員

「みつけ子どもビジネスアイディアコンテスト」のアイディアというのは、何か実現に向けることや動きはあるのでしょうか。

学校教育課長

実行委員会の皆さんの中からも、「子どもたちが考えたことをぜひ実現して欲しい」という意見をたくさんいただきましたし、学校側からも「何かそういうも

のがあった方がいいのではないか」という意見を聞いています。

ただ、今年始めたばかりですが、実現可能かというと、やはり子どもたちのアイデアがかなり限定的になってしまうのではないかと心配もあります。本当に実現可能かどうかは分かりませんが、「こんなのがあったら面白い」という広がりがあり、やはり大事ではないかと思っていましたところ。先にお越しいただきました伊藤龍司先生からは、「こうした子どもたちが考えたことが、実際には本当に実現可能なのです」と言っていた部分もありますので、ぜひまたそういう部分を見て、地域の企業の方々が、「そのスイーツ面白そうだからうちでもちょっとやってみようかな」など、また何か動きがあるとお互いにwin-winになっていくと思っています。ただ、あまり最初から限定しすぎないように、少し気をつけていたところ。

武田委員

子どもたちからアイデアを募集する段階で、実現可能なアイデアというように限定する必要はないと思いますが、様々なアイデアをいただいた中で、これは可能なものがあるのではないかと、というのを企業側で拾っていただけるような環境があったら、伸び広がっていくのではないのでしょうか。もしも、何か1つ大きな結果が出たら話題になるのではと思いました。

学校教育課長

そうですね。商工会や青年会議所の方なども実行委員会の中に入っていると思いますので、是非そういうことを企業の皆さんに繋げていただく大事な役割を担っていただければと思っています。

稲田市長

貴重なご意見ありがとうございます。

とりあえず今回は1回目ですので、こういう形になりました。ただ、商工会の方にもしっかり入っていただいていますので、その雰囲気を見ていただいている中で、何か動きができるかもしれませんので、市からも働きかけながら、今後第2

回目以降、あのような場に来ていただけるのかも含めて、少なくともアイディアコンテストの結果を聞いていただけるかどうかなど、少し戦略を考える必要があると思います。

学校教育課長

今回の表彰式について、企業の皆さんにも案内を出したのですが、日程が少し近かったせいか、来ていただけなかったのもう少し計画的にアナウンスしていきたいと思っています。

その辺をどうつついていったら良いかも含めて、もう少し考えていきたいと思っています。ありがとうございます。

事務局

それでは、全体を通して何か言い足りない意見があれば、いかがですか。

渡邊教育長

子どもの移動についてはいかがでしょうか。

時折、市長とお話をさせていただくことはあるのですが、やはり学校の立場としては、何よりも安全安心という部分を最優先にしていまいます。ですので、一旦家に帰ってから、保護者が完全に「もう学校から帰ったよね」というその後の動きをやはり学校は求めます、という話はさせていただいています。

ただ、保護者から申し出があって、学校の先生方にしっかり伝われば、それは決して拒否するものではないはず、ということでお話をしていますけれども、いかがでしょうか。

小倉委員

都会にいと、本当にランドセルの方が大きいような子どもが、ランドセルを背負って満員電車に乗って学校に行く姿を見たりすると、「なんか見附はすごく規律がしっかりしているな」、「やっぱり決まった時刻に家を出て、みんなとまとまって、決まったルートで帰らないと駄目だよ」と感じます。

学校教育の現場としては、その安全性のためには必要なことと思います。特に今、雪が降ったりすると、危険な箇所が雪がないときに比べてたくさんありますので、そういう安全面というのは大切だと思いますが、小学生ぐらいまでは学校サイドと保護者サイドの話し合いで、安全を確保した方が良いでしょう。

でも、もう少し成長しても「公共交通が使えない」や「大人になったけれどもバスの乗り方がわからない」という方が稀にいらっしゃいます。

ですので、やはりある程度そういう公共のものを使って自分で移動手段を考えて、「あそこの目的地まで行く」ということは大切だと思いますので、特に中学生は外部顧問制度や地域移行（地域展開）が進み、部活が学校でやるわけでもなくなってきましたし、それに対して保護者がいつでも送迎できるという環境でもないで、やはり交通機関やコミュニティバスだけでなく、例えばデマンドタクシーなど色々あると思います。少し塾で遅くなって、帰りのバスが無くなったり、親も迎えに来れないという時に、今市長さんが考えてくださっている「ナイトコミタク」など、午後10時ぐらいに迎えに行ってもらえるような仕組みや方法があると思います。

稲田市長

ナイトコミタクは、週2回しか走っていません。

小倉委員

例えば「週末だからちょっと友達とゆっくり勉強してから帰る」なんていうと、やはりそういう子ども向けの交通手段があると良いと思います。18歳の教育まで携わるのは教育委員会だと思いますので、やはり小さい子どもばかりでなく、高校を卒業する程度までの子どもたちに、「見附も少し田舎だけれど、案外便利だな」など、そういう利便性が良ければ住んで生活しようという気持ちにもなってくると思いますので、やはり午後9時過ぎたら、街中が真っ暗になるというよりは、少し住みやすくなるのではないかと思います。

齋木委員

私の娘は、自由に学校帰りに動くことがあまり良いとはされていないのですが、動かざるを得ない場合もあって動いたりもしていますが、そうなってくると、私も小学生までは一度ランドセルを自宅に置いてから、学校区の範囲で動くべきと思いますし、中学生以上に関しては、少し信じてあげて、動けるような環境というか、部活動の練習なども合わせて動ければよいと思います。

そうなってくると親として安全確認をしたければ、やはりみんな当たり前を持っているようになってきた携帯電話は、位置確認もできるのでツールのひとつになると思います。でもそれを学校に持って行って、先生がたくさん預かって、放課後にまた返して、貴重品の扱いだとか、安心と安全と信頼がうまく整うには、子どもたち自身への教育もそうですし、保護者への教育もそうですし、先生方の労力も増えるだろうし、でも選択肢も増やしてあげる必要性もありますし、本当に部活動という面も考えると、色々難しいと思いました。

小倉委員

市外で部活をやってから見附に来るともうバスがない。駅前の「ミツケル」は午後9時まで開館していますが、そこから帰ってくる交通手段がないですね。保護者の送迎しかないと感じます。

稲田市長

あとは、走らせたとしても乗ってくれるかという問題もあって、また悩ましいところではありますが、これはトライ＆エラーですので失敗しても良いと思っています。やってみることが大事だと思っています。施策は、失敗を気にしていたら何もできないと思っています。

いろんな思いの保護者さんがいらっしゃるので、またいろんな声を聞いていきたいと思いますし、学校の行き帰りは学校の責任でなく保護者の責任だろうと思うのですが、学校に全部責任を負わせすぎという部分を何とかならないかと思っています。

ということで、最初の議論のところですが、保護者にどういうことを理解していただくか、ということも含めたコミュニケーションも埋めていかなければなら

ない、どういう場でそういったところをどういうふうに作っていくのか、ということとは考えていかなければならないと改めて思いました。

事務局

ありがとうございました。

それでは、武田委員もよろしいですか。

武田委員

先ほど市長が言われた通り、やっぱり先生の責任っていうのは難しいと思います。学校から一步出れば目が届かなくて当然だと思います。先生が街を巡回して、ずっと毎日必ず監視しているわけではないですし、先生の目の届かないところは必ずあると思いますので、放課した後のことについて先生に責任を問うというような雰囲気は間違えてるような気がします。

私はただ、家が市街地でなく大分遠隔地、街から離れているので、やはり地元の子どもたちを見ると出不精な子が多い印象はあります。

家に帰ってゲームを開けば友だちと繋がれる。でも、そうじゃなければ友だちのところには行けないというような、特に冬になれば間違いなく自転車も乗れないわけですので、やはりそうなってくるとあまり外に出たがらない子どもが増えてきてる雰囲気は感じます。

何か移動手段があれば良いのですが、安全面を考えると、子どもたちが手軽に使える移動手段というのはなかなか難しいと思います。

稲田市長

普通の路線バスは1人で乗って欲しいと思っています。私も東京にいた人間ですが、見附の子どもたちは全然バスに乗らないなと思いました。首都圏だったら普通に電車やバスに子どもが1人で乗っています。保護者の皆さんも、仕方なく車で送り迎えをしているところがあるのかもしれないですし、少し不安に思っている保護者が多いように感じます。

武田委員

私の家の辺りは、路線バスを含め、もう公共交通機関がありません。

稲田市長

デマンドタクシーは、子どもたちにはなかなか使いづらいようですね。

武田委員

子どもたちだけで使うとなると、保護者としても不安があります。

稲田市長

そこを「使ってもいいよ」というように、もっとPRするというのもあるのかなと思っています。

武田委員

何か簡単な使い方や安心をどうするかだと思います。子どもたちだけで利用したとしても、保護者に必ず連絡が行くような方法があると良いと思います。自分たちで簡単に、自分でデマンドタクシーを呼んで、小学生が乗って行くっていうのはなかなか難しいと思います。

稲田市長

ありがとうございます。特に今決める話ではありませんが、ご意見聞かせていただきましてありがとうございます。

事務局

よろしいでしょうか。

それでは、そろそろ意見が出尽くしたようですね。

最後に市長から一言お願いします。

稲田市長

今日は本当にありがとうございます。

あとは、「見附市を担う人材について」というタイトルの部分が、少し薄れてしまった感じがあるのですが、最後によろしければ一言「こういう人材を育てていく」など、少し大きな話になりますが、ご意見いただければと思います。

小林委員

「ふるさと見附を愛する子ども」、「世に役立つことを喜びとする子ども」という大テーマの構造でやってこられたということで、私はすごく立派な大きなテーマが掲げられていると思って、これを一旦「こういうふうに変えていきます」というのは、あまりしない方が良いのではないかと考えています。いろいろ知恵を絞って出してくるということは大事な問題で、考えたいというようには思いますが、なかなかざっくり全員に「さあどうだ、これでいくぞ」ということはなかなか大変だろうし、本当によくできていると思います。なかなか一般市民で聞くことはなかったですけど、やはり教育委員に入ってから「こういうテーマです」ということを聞かせていただいて、ずっとそれで来ていますから、慣れ親しんでサラッと出るあのテーマにもなっていますし、私は非常に良いと思っています。

小倉委員

私もやはり最初に言ったように、子どもの頃からの積み重ねでいろいろな経験をさせてあげることが子どもたちの大人になってからの資質になると思います。

ですので、子どもたちにいろいろな体験をまずさせるためには、やはり大人が関わらなくてはいけない、ということをずっと思っています。資料に「たくましく生きていく生きる力を育成する」という記載がありますが、本当にたくましく1人で交通機関使ってどこでも行けるようなたくましさや、親が仕事で忙しいから我が家は私が（子どもが）晩ご飯を作るなど、そういう教育と言いますか、家庭環境を築くことが、充実した学校生活を送れたり、友だち関係や社会性を育むことに繋がっていくと思いますので、ぜひ行政にお願いしたいことは、「市ではこういう取組をしていますよ」ということを市民にわかりやすく伝えていただき

たいのです。「広報みつけ」は必ず全世帯に配布されますし、若者世代だったらLINEやメールが届くと思いますので、いろいろな便利ツールがあるので、そういうことをぜひ情報発信をしていただきたいと思いますと思っています。

齋木委員

「見附を担う人材」は、人間力がある人材が育つのが何よりだと思いますので、先ほど教育長がおっしゃられていた「笑顔の意味」というか、例えば「その経済的な支援をしたから得をした、でもそれだけじゃない部分ですよ」っておっしゃったところがすごく心に残っています。

先日の校長会で、「2校合同で何か取り組みましょう」と校長先生がおっしゃられていました。私は「いいじゃないですか」と心の中で思いました。

その笑顔の中身として、例えば、行事的なものを学校単位だけでなく、学校同士が繋がって行事ができるとか、小学校と中学校が繋がってもいいですし、そういうことのきっかけの動き出しは、やはり市からの声掛けが無いと、学校単位では動くことは難しいのかなと思います。

そういうところで、今おっしゃられた「経験をたくさんする」という意味では、きっかけも市から作っていただけると、上手くできるのではないかと思います。それがこの「心が豊かな人材を育ててほしい」という面で感じたところです。

武田委員

「未来の見附を担う」というと、だいぶ重くなりますが、「プレイラボみつけ」があったり、子どもたちが過ごす場所が増えるような活動もされてるし、そういう中で「戻ってきたい見附」をどうやって作っていくか、というのは難しいのですが、「見附を担う人材」というのは、立派だから見附を担うとか、そういうことじゃないと思います。

誰が担ってもいいかなと思いますが、ただ「この見附のために自分が尽くしたいんだ」という人が育っていったらいいんだろうなと思います。

決して立派だから、立派なことができるわけじゃないと思ってます。

稲田市長

ありがとうございました。

先ほど広報みつけの話がちょっと出ましたが、今日は担当者が同席してますので、市民の皆さんには情報発信が大事だってことで、ひとことお願いします。

企画調整課長補佐

企画調整課の秘書広報室長の山口といいます。

今日は参加させていただきありがとうございます。

小倉委員の方から、情報発信の重要性ということでお話をいただきました。

広報誌は毎月1回出していて、あとはLINEでの発信やSNSも最近力を入れているところです。

やはりそれぞれがターゲットが違っていると思っていて、広報誌というと手に取って一番ご覧いただいているのは、やはりちょっと年代的に高い方なのかなというふうな感覚を持っていて、決してそれ向けに作っているわけじゃないのですが、ニーズはそういうところなのかなという認識を持っています。

一方でLINEやSNSは、やはり若者ターゲット、子育てターゲットでありますので、そういったことを把握しつつ、どういう情報出しをしたらいいのかを常に協議しながらやっています。

今、いろんなお話をお伺いしましたので、教育分野でもこういった計画を作ったら、行政の中で承知しているだけではなくて、それを外に発信して、いろんな方の声をまた取り入れて展開できるような仕組みが理想ですが、できたら良いと思います。

今日はありがとうございました。

学校教育課長

私も、先ほど齋木委員のおっしゃった、学校間同士で繋がれるっていうところで、今年スクールアカウンタビリティをやっていますが、やはり保護者が自分の学校の教育、子どもの姿や活動には興味を示して見て行かれるのですが、その学

校が取り組んでいることや、あるいは見附市が取り組んでいることに対しての関心が低くなってきている、ということの問題意識として持っていました。やはり、関心を持ってもらうために何をすればいいのか、ということで相談しているところですが、子どもたちがお互いに交流している姿を見れば、小学生と例えば中学生が交流しているところを見れば、小学校の親は「将来、この子たちはこういうふうに大きくなって、また下の子たちと関わるんだな」とか、中学校の親は「子どもたちにこんなふうに接するところで、成長を感じるな」とか、そういう良さをお互いに感じてくれるのではないか、ということを考えていました。

自分の子だけでなく、この見附のみんなの子どもをどう育てるか、というところに関心を持ってもらうために、いろんな知恵を働かせていく必要があるとお話を聞いて考えたところです。

こども課長

私も小倉委員が言われていたように、いろいろな経験を子どもにさせてあげるということは、すごくいろんなことに繋がると思います。いろんな豊富な発想であるとか、あと何かをやる自信ですね、そういったものに繋がるんだろうなというふうに思っていますので、そういう環境を作ってあげたいと思います。

「こども計画」を作るときもそうでしたが、やはりどこかの部署一つの取組で作れる、ということではないと思います。いろんな組織と関わって、例えば市民団体であったり、地域コミュニティであったり、そういったところに関わって、いろんな経験ができるのだろう、という思いがありますので、そういったところを行政としましては、働きかけを行い環境を作っていきたいと思ったところです。

教育部長

今日は、いろんなお話を聞かせていただきましてありがとうございました。

その中で一番印象に残ったのは、小林委員のロールモデルのことで保護者づくりのお話です。そういえば自分も上を見て判断したり、上手く子どもに伝えられたのかなとか、いろんなことを思いました。永遠の課題ではあるでしょうけれど

も、やっぱり未来を創る人材というのは、みんなでまち全体で作っていく必要があるんだなということを今日再認識させていただきました。

ありがとうございました。

渡邊教育長

私は「ふるさと見附を愛する子ども」「世に役立つことを喜びとする子ども」、現在掲げているこの二つをこれからも大事にしたいなというふうに思っています。

まずは「ふるさと見附を愛する」ということは、自分の「拠って立つ見附」というものをしっかり持っていること。やはり「拠って立つもの」がある子どもは、何か困難にぶつかったときに、自分の心を支えてくれるものとして、それを意識して、また次に向かって頑張っていこうという気持ちを持つと言われています。

その根本となるものをしっかりと子どもたちに身に付けさせてあげる、そういう子どもを育てるという意味で、「ふるさと見附を愛する子ども」というこの言葉はとにかく大事にしていきたい、そんなふうに思っています。

それから「世に役立つことを喜びとする子ども」は、これもいろんなことがこの背景にあると思っています。褒められるから何かをやるでは、褒められなくなったらその子は行動しなくなる、と言われています。

だから褒められるかどうかということではなくて、自分がそのことに満足できるかどうか、自分がやっていることに喜びを感じられているかどうかというのが、その子の行動規範であることが、力強く次に向かっていく大事なエネルギーになっていくんだというふうに思っていますので、その中には当然今の「Job チャレ教育」で目指している様々な資質能力がそこに入ってきていて、そういったものを使いながら、やっていくことで喜びを感じていくと思います。そういう意味で、「世に役立つことを喜びとする子ども」、これもう本当に非常に大事な姿だなと思います。

ですので、この2つを大事にしつつ、この2つの背景にあるものをさらにまたしっかりと捉えながらやっていくことが、何より大事なことだと思っています。

た。

稲田市長

ありがとうございます。

2時間ほどなりましたけれども、今日は本当に、教育委員の皆さんからいろんなご意見いただきましてありがとうございました。

この最後のまとめも含めて、様々なことにキーワードをいただいたと思っています。小林委員と今ほど教育長からも話がありましたが、2つの理念「ふるさと見附を愛する子ども」「世に役立つことを喜びとする子ども」について、これは大事ですよと言っていたいただきました。私もそこに共感し本当そうだと思っています。

また小倉委員からは、経験させるってことが大事、大人が総がかりでやっていくという話のキーワードもいただきましたし、齋木委員からは、人材育成、学校同士の繋がりという話と、また笑顔ということ、これは教育長からも話がありましたが、その意味をどう繋げていくかっていうこともお聞かせいただきました。

武田委員からは、先ほど議論全般で出てきた保護者づくりといった点、こういった点についてもまた生かしていければと思っています。

これから総合計画ということで、まちをいかに未来に続く持続可能な形にしていくか。人口減少していく中で、いかに子どもたちができるだけ見附に戻って来ていただけるか、今までそのように考え培ってきた理念を土台にして、そのまま崩す必要はないのではないかという思いはありますが、そんな中で、いかに見附だったら教育させたい、あるいは見附で良かった、見附に戻って来たい子どもたちが、いかに出てこれるか、そんなところに繋がれたらいいのかなと思います。

それで保護者のことも含めて、またいろいろと考えさせていただければと思っています。

いずれにしても、先ほど冒頭にも申し上げた通り、これから総合計画それから教育大綱というのを作っていく、大切な年になっていきますので、いただいた意見も踏まえながら、教育委員会と市長部局それぞれしっかり連携して取り組

んでいきたいと思いますので、これからも何卒様々なご意見を頂戴いただければ
と思っております。

本日はどうもありがとうございました。

事務局

ありがとうございました。

それでは、これにて終了とさせていただきます。

スムーズな進行にご協力いただきありがとうございました。

4 閉会

事務局

これにて令和6年度総合教育会議を閉会といたします。

本日は長時間にわたりご議論いただき、ありがとうございました。

15時57分 閉会